

毎月1回20日発行

(昭和31年3月28日第三種郵便物認可)

やま博物館

編集責任者 大町山岳博物館



野外博物館

北アルプスは今日も静かに微笑んでいる。しかし、その自然は深く大きい。若人は今日も残雪の輝く北アの探究に余念がない。北ア一帯が野外博物館として開設される日も間近い。

NO. 6

1956年7月20日

大町山岳博物館後援会 発行



流鏝馬(やぶさめ)の神事

……若一王子神社例祭……

王子神社例祭に行ふ流鏝馬(やぶさめ)の神事は、古い伝統を保っているものとして全国に余りにも有名である。この神事を見るごとに旧城主仁科氏が如何に盛んに、どのような勢力があったかがうかがい知れると思う。全国にやぶさめの神事が現在残っている処は鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮、京都の加茂宮と大町の若一王子神社の三つだけといわれている。このやぶさめは鎌倉時代、武家の間に盛んに行われ、公家(くげ)や武士がその勝負を争う武技として催した場合と、又神事として王子神社のように神前に執行した場合とがある。大町においては、このやぶさめに乗る者を射る手と書き、イテエ、転じて射隊というようになった。その選び方は両親の揃っている。けがれない詰り近親に近く不幸のなかつた。7、8才位の男の児に限られ、その内から抽籤できるもので、その選に当たった者は、不浄を戒め体を清めて奉仕するのが常であった。維新前迄は、仁科神明宮が16日、翌17日が王子神社の例祭で、2日に亘り兩社が双互同一神社のような形体で、共通に執行されたのである。神明宮は費用に堪えかね、やぶさめの神事をやめるに至ったことは實におしいことである。

やぶさめのうつり変り

川中島戦争の永録の頃の記録によると、仁科氏滅びて後は、神明宮の三神主の内から一騎、仁科氏の分れて神明宮の宮奉行である荻田見家から一騎、大町の年寄曾根原家から一騎を出したもので、その後宮本部落から一騎、荻田見家から一騎、大町では年寄十人の内か

ら交代で一騎、出すことに改め、維新に及んでいる。(大町の年寄というのは町の行政を司るもの) 維新後は諸制度の大改革が行われ、やぶさめも又民主化の精神から、上仲町伊藤重右エ門氏が一般氏子より出すことを唱え、私費を投じ津島から何騎ものやぶさめの馬具や衣裳等を購入してこれを各部落に寄贈した。したがって今のように、大町のみで十騎以上も出すもとなしたのである。

やぶさめ神事の次第

先づ三日町より射手(乗馬)、年番、父兄付添いで、次の大黒町の入口に至ってその町の射手を迎え、順次下流の町々、九日町、六九町、北原町、白塩町、上仲町下仲町、南原町、仁科町の十騎は八日町を経て終点五日町に到着、休憩する。年番は五日町に設けられている臨時社務所に無事到着と結構な祭典の趣きを挨拶し、各年番宿所を訪い、相互に挨拶をかわすのである。射隊は小鶴の後、上りには下りの反対に三日町を先頭に仁科町を最後とし、順次射隊を出した部落(三日町は遠いので除く)を廻り、王子神道参道に至り、神主の誘導によって境内入口禁札前においておはらいを受け、予て馬場にこしらえてある3ヶ所の的に向い、三度空廻り、3度射る、3度は殆んど當てがう程度で、つまり9度射るわけである

この的板は神明宮御造営用木山の、山奉行の跡である平区野口の矢口氏、又矢竹は元竹奉行の跡である八坂村一ノ瀬勝野氏の供進されたもので、射隊は古式により厳かに執行し終って社務所から廊下により神前に進み、無事やぶさめの神事を果し申上げた奉告と、たぶさわった光栄とを感謝し、健康と息災とをあわせ祈願し神前を退下社務所に戻り的板と御神符を拝受し、かくしてやぶさめの神事は全く終了する。

舞台の囃子もにぎやかに

舞台は別に「山車(だし)」とも呼ばれ、町内には總計六つあるやぶさめ神事と同じく18ヶ町が五日町の臨時社務所に集合、相互に挨拶をかわすのである。休憩後、本通りを真直にハヤシに合せながら進み、王子神社大門前に整列し、夕刻提灯でかざり境内へ入る。神前で各々各町独特のハヤシを奉し、境内をひとまわりして退下する。祭式は仁科氏が京都の祇園の形式を取り入れたものである。

【写真は境内馬場において的板に向かって弓を射る射隊】



舞台は各々の彫刻、装飾、ハヤシで町内の若者達にひかれて、五日町に集合する



初夏の山頂に憩う一時（薬師嶽頂上より剣、立山方面を望む。
右の遠景は唐松岳、中景右よりの平は五色ヶ原）—7月10日
撮影—

夏山開く

≪日本アルプスどの山見ても

冬の姿で夏になる≫

山岳人のひとり舞台であった日本アルプスも ≪山びらき≫ の声を聞くと、身近なものとして世間の人々の話題にのぼって来る。

山開きこそ美しい自然の中にとけ込んで日常生活の煩しさから解放してくれる呼掛けの声である。

山開きの歴史

信仰の対象、探検の対象であった ≪おやま≫ もアメリカで起った国立公園運動が世界的関心をよび起し、日本でも昭和六年国立公園法の制定となった。美を愛し、自然を慕う国民の厚生、休養の理想境であり自然科学研究上の野外教室として清浄で楽しい聖地として保護されることになった。

かくして自然の大衆化運動は益々発展し、登山も人々の身近なものとして登山熱の高まりと平行して各地に山小屋が設けられた。高山に短い夏がおとずれると山小屋は一斉に活動を開始する。涼を求め山岳の自然に憧れる人々がどっとおし寄せて、まさに山が開かれるわけである。やがて時を同じくしての山小屋の開始は年中行事の一つとして国民生活の中に続け込んでいった。

夏山の気象

夏山の特徴 四季の変化は夏と冬のくり返しで、秋、春という季節はほんの一時期である。しかも高山は夏が短い。日本アルプスで夏といえる時期は7月中旬から8月中旬までにすぎない。

気温 1日のうちの時間的变化は3,000米級の高山では最低気温は真夜中から早朝までのひろい範囲にわたり、最高気温は比較的短い時間となり大体午前10時より12時までのあいだに示される。荒天の日は一日おっや変化がなく10度前後を上下しているにすぎない。

湿度 高山では30~40%を上下していて霧の襲来とともに90~100%はねあがるはげしい変化をする。

風 高山ではほぼ一定で西風が吹いている。夏山はがいて平穏であるが、それでも低気圧、前線、台風などがとおれば猛烈なあれかたをする。

夏山の動植物

寂しかった高山の冬も山麓に夏がおとづれる頃、春から夏と駆足で進む、むしろ高山の夏は春であると云える。

雪溶けを追うようにミズバショウ、ユキワリソウ、



ツガヅクラなどが開花し、雪溶けの線に沿ってベニバオシモツケ、コバイケイソウなどが赤や緑に芽吹き始める。新緑に色づいて来た灌木の間では小鳥の営巣が始まりコマドリ、メボソ、ウグイスなどが亜高山帯に、高山帯ではハイマツの下に既に夏毛に変わったライチヨウが巣をつくり始める。日時が進んでハイマツの間に点在するお花畑の礫原に高山植物の女王ヨマクサが可憐な花をつける頃、まさに ≪おやま≫ は盛夏の候である。（写真は針ノ木岳雪溪にすつかり真夏の衣がえをしたライチヨウ）



おわかりですか？ このガラガラした河原に何かすんでいるのでしょうか。よく注意して見ると何かいるようです。さてこの鳥は本州各地の湖沼、河原、海岸の砂礫地に営巣するコマドリのひなです。雛は背面黒褐色をおび、岩石と全く同色で砂礫の陰にじっと身動きもしないでいると、殆んど人に気づかれませんがコマドリはビヨ、ビヨ、ビーヨとなき、動物質を食物とします。

（動物園ニュース）モリアオガエル

この蛙は本州南部以北の山地に分布する。体の背面は青色を呈して美しく、前後肢の蹼はよく発達し、各指の先には吸盤がある。樹上で生活し、昆虫類・クモ類その他の小動物を捕食する。同属の近縁種シュレーゲルアオガエルは水田畔の土中に白色の泡のような卵塊を産むが、モリアオは樹の枝に産卵する。（水田畔や高層湿原の草の上に産むことも多い。）その白色球状の嚢袋が沼の岸に生い茂る灌木の枝にぶら下って、幾百の新しい生命が直下の水面に落ちる



日を待つさまはまさに神秘的である大町附近では神城村、八方山、梅池白池等に多く、産卵期は神城で6月中旬、梅池等で7月中旬である。

（写真は本館蛙飼育舎に産みつけられたモリアオの卵塊）



今年の研究登山は天狗原

研究会、同好会主催の本年度研究登山は8月11日12日、白馬大池天狗原で行うことに決った。講師として信大地理学教室小林国夫先生、同生物学校教室羽田健三先生が参加するが、希望者は7月31日までに本館へ申込むことになっている。天狗原から眺める豪壮、秀麗な白馬連峰はまさに絶景であり、本館では多数の皆さんの参加を望んでいる。【写真は登山下見中の八方屋根班、第一ケルンにて】

博物館は新築へ

博物館建設推進委員会はその後慎重審議を重ねていたが、7月に入り遂に現在地に増築の案を変更し、新たに植物園内に新築する案を決めた。このため工事はおそらく8月上旬には開始され10月末には完成する見通しとなった。今度建てられる博物館は367坪の本館で1万坪の附属植物園と、附属動物園を併設し、更に児童遊園地も設けられる。移転後の現本館施設はそのまゝ市立図書館として利用される。

【博物館だより】 6月23日機関紙「居谷里」1号発行 24日閃電雨量計設置隊出発 研究会役員会 27日クモマツマキチョウ生態観察（学芸部） 29日-7月3日居谷里調査 30日第2回山の歌声 7月1日設置隊帰館 6日山の歌集「山びこ」発行 7日居谷里夜間昆虫採集 9日建設推進委員会 10日カモの生態観察 建設推進委員会 12日居谷里植物生態観察 13日公民館博物館合同委員会 14日研究登山下見（事業部） 17日若一王子神社ヤブサメ祭スライド撮影 18日第3回山の歌声 文化財天然色映画撮影 19日雨量観測（奥黒部） 出勤準備会 山岳映画鑑賞会（公民館）

博物館後援会員募集

博物館後援会の会員を募集しています。年額千円を納める団体ならびに、年額三百円以上を納める個人を正会員といたします。会員には次のような特典があります。

- 1、博物館の諸指導行事を通知し参加の便をはかる。
- 2、毎月「やまと博物館」を配布する。
- 3、団体に講師、指導者派遣の求めに応じる。
- 4、博物館に支障のない限り、博物館の資料（標本、図書、写真、図版等）器具の借出しをあっせんする。
- 5、その他博物館で種名同定、研究指導など諸種の便宜をうけるをあっせんをする。
- 6、いつでも博物館を無料で観覧できる。

おしらせ 本紙の購読を御希望の方には実費1部10円でおわけします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます 大町山岳博物館後援会

山 岳 会

設立は大正8年部員数40名、機関紙「部報」を発行している。パッチ図案は山靴の台座にピッケル、ザイルとGACの文字を配したものの。當部では部員章（正部員章は銀製）は2年部員の秋に下附し、ナンバーは登録しなければならない。尙このパッチをチーフリーダー鈴木迪明氏より寄贈を受けた。その年（昭和30年）の冬山で同氏他3名の若き命が、北アルプス鹿島槍で失われている。ここに本紙上より謹んで哀悼の意を表したい。東京都豊島区目白町学習院大学内にある。



学習院輔仁会

編集後記 開設して25年になる今年の11月には、住みなれた今の博物館が東山植物園に移転する予定です。植物園からは北アの連山が一帯に収められ、動植物園を併設して偉容を誇ることでしよう。▲増設から更に新設へと発展したかげには、後援会の皆さんの並々なぬ努力がありました。本館では今、新築計画に万全を期しています。▲本館と大町駅の本紙無人スタンドは好評をよんでいますが、夏山を迎えて更に四ツ谷駅前にも増設します。本紙を購読される皆さんからの御投稿をお待ちします。

やまと博物館 No.6 1956.7.20発行
編集発行人 大町山岳博物館
発行所 大町山岳博物館後援会
長野県大町市神楽町電話211番
印刷所 信州印刷株式会社